

授業者 金尾 茂樹

クラス 3年A組 40名（男子20名，女子20名）

場 所 3A HR

## 1. 単元 「自分」「他者」を考える

### 2. 単元のねらい

中学校3年生の夏休みの国語課題の中に、「クローン人間」について述べられた説明的文章があった。それは、自己と同じものとして他者と向かい合うという視点が「人間」について考える場合に重要だという内容である。これは、学校でも社会においても共に生活するための基盤となる視点である。

ある時、私は、クラスの生徒と彼自身の進路について話をしていた。彼は、「一生かけてこれをやりたいというものが見つければ、自分はきちんと頑張れるのに。」と言った。

社会的存在であるわたしたちは、周囲の人々と関係を持ちながら生活をしている。「自分」と「他者」の問題は、生活の場面では様々に立ち現れているし、教室で学ぶ文学的文章ではこの問題に焦点が当てられて描かれている。「自分」と「他者」についてじっくり考えていくことは、中学校3年生にとって意義のあることだと考えられる。そこで、『他者』との関係の中での『自分』について考える」というテーマを設定し、「自分」「他者」について生徒に考えさせることにした。

まず、「自己」と「他者」の関係について書かれた二つの文章を読み、そこで述べられている「自己」と「他者」についてまとめる。一つ目は、大森荘蔵の「ロボットは人間か」（『流れとよどみ』）である。この文章は、「自分にとっての他者」は「自分にとってのロボット」と同等の立場にあるが、相手になり変わって想像することをきっかけに自分は相手と「人間仲間」として結びつけられ、また同時に、相手を心と意識を持つ「人間」として認め、自分自身も「人間仲間」の一員になるという内容である。二つ目は、石黒浩の文章である。大阪大学で「人間酷似型ロボット」の研究をしている石黒が自分自身のアンドロイドを製作した時の「自己認識」の経験を述べたものである。それから、「ソフトウェアとしての精神」（室井尚・吉岡洋）を読み、本文で述べられる変容しつづける「自己」について、生徒に応答をさせる。

このように、生徒の中に立ち上がっている「自分とは?」「他者とは?」「人間とは?」という問いを複数の文章でぶつけることでこれらの問題に対する生徒たちの考えを揺さぶり、自らの問題として考えていく姿勢を育成しようと考えた。

### 3. 単元計画（全9時）

第一次(5時間) 「ロボットは人間か」(大森荘蔵)、「自分のアンドロイド」(石黒 浩)を読解し、「自分」「他者」について整理する。

第二次(2時間) 「ソフトウェアとしての精神」(室井尚・吉岡洋)を読解する。

第三次(2時間) 「自分」「他者」について考える。

・授業を通して考えたことを文章にまとめる。

・文章を読み合い、思考を深める。 ※本時

使用教材 『流れとよどみ』大森荘蔵 『ロボットとは何か』石黒 浩  
『情報と生命 脳・コンピュータ・宇宙』室井尚・吉岡洋

#### 4. 単元の評価規準

ア. 国語への関心・意欲・態度

- 1 「自分」「他者」というテーマに興味を示し、積極的に理解・表現しようとしている。
- 2 書き手によって提示された課題について、自分自身の在り方に照らし合わせながら、積極的に考えようとしている。

イ. 話す能力・聞く能力

自分の経験や理解したことを整理して、自分の考えを説明している。  
意見や主張の根拠を確かめ、自分の考えとの違いを意識して聞いている。

ウ. 書く能力

意見や主張の根拠を確かめ、自分の考えとの違いを意識して、考えたこと・疑問に思うことを的確に表現している。

エ. 読む能力

書き手の論理の展開を的確にとらえ、提示される課題について自分の考えを示している。

オ. 言語についての知識・理解・技能

抽象的な概念をあらわす語句について理解を深めている。

#### 5. 本時の主題

「自分」「他者」について書いた文章を読み合い、思考を深める。

#### 6. 授業展開過程

時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	評価の実際
5	導入 前時までの学習を振り返る。 本時の学習内容を確認する。	作文を返却する。	
30	展開① 生徒作文のプリントを読む。 具体例や根拠、結論をまとめる。	数名の作文をプリントしたものを配布し、書いた本人に音読させる。 具体例や根拠、結論に着目させる。	プリントを読んでいることで評価する。 提出された作文で評価する。
50	展開② 作文の発表をもとに、「『自己』と『他者』」というテーマで考えたことを書く。	自分の考えがどのように変わったかについて見つめさせる。	テーマに関わって書こうとしていることで評価する。
50	終結		

授業者 川中 裕美子

クラス 5年D組 40名（男子20名，女子20名）

場 所 5D HR

## 1. 単元 古典における「人物評」

### 2. 単元のねらい

書き手がそうしているように，作品の登場人物それぞれを魅力的な人物として学習者に差し出したい，というのがこの単元以外にも共通する授業のねらいである。立派で非の打ちどころがないという意味での魅力だけではなく，どうしようもない人物だけれども何か気になってしまう，という魅力もある。そのような「描かれている人物」を味わうために，正確に読む，書き手の意図を見落とさず読む，ということは大前提であるのだが，この単元では特に次のような点を中心に扱ってきたい。

同じ作品の中で登場人物二人が対照的に描かれている場合は多い。例えば『大鏡』における道長と伊周，『史記』における項羽と劉邦。ここには書き手の評価が明確に表れている。規模は違うにしても，どちらも権力争いの結果を踏まえた上での語りであるから当然と言えば当然なのであるが，対比的な書き方を見ていくことで，書き手（語り手）がその結果の原因を何に求めているのかということがより明確に見えてくる。

このような人物の描かれ方について学習をすすめていくことは，学習者自身が登場人物をどのように評価するのか，ということを考えることにもつながってくる。さらに，その自分の評価と書き手の評価とはどのように関わっているのかということについても思考を深め，学習者自身が，登場人物に対して何らかの評価ができること，評価をしたいという読み取りができることをねらいとしたい。

### 3. 単元計画（全25時）

#### ①『大鏡』（道隆伝，道長伝）5時間

- ・道長と伊周がそれぞれどのような人物として描かれているかを読み取る。
- ・二人の描き方の違いがどこから生じているのか，語り手が登場人物をどのように評価しているのかを考える。
- ・道長と伊周をどのように評価するか考える。

#### ②『史記』（項羽本紀，高祖本紀）20時間

- ・項羽と劉邦がそれぞれどのような人物として描かれているかを読み取る。
- ・二人を取り巻く人物との関係も踏まえ，司馬遷が二人をどのように対比させているのか読み取る。
- ・項羽と劉邦をどのように評価するか考える。

### 4. 単元の評価規準

#### ○関心・意欲・態度

- ・学習課題に対して積極的に取り組み，書き手の意図や文章の構造を読み取ろうとしている。

#### ○書く能力

- ・自分の考えを深め、文章に表すことができている。
- ・論理的な文章になるように工夫をし、わかりやすいものになるように考えている。

○読む能力

- ・それぞれの作品における人物の描写についての的確に読み取ることができる。
- ・人物がどのように評価されているか、それが何を根拠にした評価かを読み取ることができる。
- ・描かれている人物に対して自分自身がどのように評価するかを考えることができている。

○知識・理解

- ・古文、漢文の知識を元に正確に文章を読み取り、正しく理解している。

## 5. 本時の主題

- ①本文の叙述に即して、人物がどのように描かれているのかを正確に読み取る。
- ②項羽と劉邦それぞれを司馬遷がどのように描こうとしているのかを考える。
- ③項羽と劉邦それぞれを自分がどのように評価するか考える。

## 6. 授業展開過程

時間 (分)	学習活動	指導上の留意点	評価の実際
5	○導入 ・本時の学習内容について確認する。		
20	○展開Ⅰ ・『史記』（高祖本紀）を読み、劉邦の人物像を読み取る。  ・今までの学習を振り返り、項羽がどのような人物として描かれていたかを確認する。	・高祖（劉邦）がどのような人物として描かれているかに着目させる。 ・本文に即して確認する。 ・項羽と劉邦の違いはどこにあるとされているのかを確認する。	・問いに正しく応答していることで評価する。
30	○展開Ⅱ ・司馬遷が、項羽と劉邦をどのように評価しているのかをまとめる。 ・自分が、項羽と劉邦をどのように評価するかを考えまとめる。	・学習者がどのようにとらえるか、ということと、書き手がどのようにとらえているか、ということを混同しないようにまとめさせる。	・自分の考えを文章にまとめていることで評価する。
45	○まとめ		・記述したもので評価する。